第41回日ロ研究交流に参加して

中島　美由紀

日ロ研究交流とは、北海道立総合研究機構水産研究本部（前北海道立水産試験場）が1989年から22年にわたり続いているサハリン漁業海洋学研究所（略称はサフニロ、英名は Federal State Unitary Enterprise "Sakhalin Research Institute of Fisheries and Oceanography"、英名略称は FSUE "SakhNIRO"）との研究に関する交流です。サハリン州のユジノサハリンスクで行われました第41回の交流に参加しましたので、報告します。

実施期間は平成22年10月20日～23日の3泊4日で、水研本部からは稚内水試の中明幸広調査研究部長を団長とし、中央水試の秋野秀樹研究主任との3名で参加しました。出発前の事前打合わせを札幌で行ったのが同月5日で、それからビザを申請して飛行機を予約するという、本当に海外出張なのかと疑うくらい短い準備期間でした。せめて、行程は余裕を持たせようということになり、出発日には新千歳空港の国際ターミナルに早めの午前中に3人で集合しましたが、搭乗するサハリン航空機が離陸したのは予定時刻より1時間半近く遅れる始末。サハリン空港で出迎えて下さったのは、サフニロの今回の交流担当である応用生態部長で魚類寄生虫学の研究者のフロロフ博士と通訳のアンナさん、それに運転手で、彼らの話ですとサハリン航空機の発着が予定より1時間以上遅れる確率は半々とかで、随分待ちぼうけされたようでした。この3名の方が今回の交流で終始、随行して下さり、特に通訳のアンナさんは日本語が上手で会話に困ることはありませんでした。さて、フライトは1時間半ほどでしたが、渡航した時期の時差はサハリンでは北海道より2時間早く、着くと既に夕方5時近くですぐに暗くなりました。その後、宿泊先の旧日本資本系のホテルにてフロロフ部長、アンナさんとスケジュールの確認をして、第一日目が終わりました。

翌日の21日は、サフニロの所内の会議室でこの交流の主な目的である研究報告会が開催され、その後に各階の研究室を見学して終日を研究所内で過ごしました。この日、情報交換された研究報告の課題と発表者は以下の5題と、北海道・サハリン水産交流推進事業第4次計画として実施されている「コンブ漁場における海洋環境と生態に関する日ロ比較調査」に関して水試のこれまでの成果報告が1題ありました。日ロ双方の通訳を交えての発表でしたので、質疑時間を含めますと1課題に約1時間費やしました。

1. 小クリル諸島におけるミズダコ漁獲量変動　ユルコワ Yu. A.（サフニロ海洋生物資源部漁業無脊椎動物研究室）
2. 北海道宗谷沿岸におけるミズダコの資源管理　佐野稔・中明幸広（稚内水試）
3. サハリン島のサケ・マス類が遡上する川の生態研究の主な方向性　ジヴォグリャドフ A. A.（サフニロサケ・マス類研究部サケ・マス類資源動態研究室）
4. 北海道の流域生態系におけるサケマスを中心とした物質循環と食物網　中島美由紀
5. サハリン島の南東部における潟のイクチオプランクトンムハメトワ O. N.（サフニロ応用生態研究部水生生物学研究室）
6. 北海道日本海北部利尻島と、北海道日本海中部忍路地区におけるコンブ類の分布状況の特徴　秋野秀樹（中央水試）

サフニロの担当する調査域のサハリン島とクリル諸島は、海洋はともかく河川や汽水域に生息する漁業対象種もそれらの生息分布域が北海道と連続している地域であり、いずれの課題にも聴講したサフニロの研究者から活発な質疑がありました。サフニロでは、海洋と並び汽水湖沼や河川の魚貝類とサケマスの生態に関する研究を特に基礎科学の立場から数多く研究されており、北海道にとっても有意義な研究情報を有していました。

翌日の午前中は、同会議室にて、現在実施されている共同研究の作業の進捗状況や今後の交流予定等を協議しました。午後には北海道サハリン事務所を訪問して、小田原所長と秋野研究主任と同期入庁の近藤主査からサハリン州の経済の現状などを聞きました。その後、フロロフ部長の他にサフニロから科学技術交流の総括責任者のラドコワ

博士、サケマス研究者のアガロドニコフ氏らと車でコルサコフから東に 30 分ほど離れたアニワ湾沿岸のダイビングステーションを見学し、実際の調査の方法等を教えて下さりました。その際に彼らの調査風景のビデオを見て、「調査」を「research」や「survey」ではなく、「exploration」と表現する理由がわかりました。キャタピラ付きの雪上車やゴムボートで道路も岸壁もない調査地へ行く様子はまさに探検そのものとして映っていたからです。また、ここでは浜に打ち上げられたコンブやウニ・カニ類の殻の大きさとその数量の多さを目の当たりにして、さらに、味を日本人に教わったというハナサキガニやらアワビ、エビ、コンブが鍋に丸ごと入った海鮮スープをいただき、この沿岸の漁獲資源の豊富さを実感しました。

滞在の最終日は市内見学で、魚市場やサハリン州立博物館(旧樺太庁舎)、ロシア正教会等を回り、最新のショッピングモールで体高が約 30cm と推察されるオヒョウの輪切りステーキの昼食に与り、結局、空港に到着したのが離陸時刻の 1 時間前を切り、フロロフ部長が最後に「Run up」と冗談交じりに言ったほど、慌ただしい旅程は最後まで変わらずじまいでした。オホーツク沿岸の山間で育った私の幼い頃の印象では、海の向こうは流氷がやってくるばかりの何の情報もこない彼方の地でした。しかし、今回のこの交流に加わり、そこに住む方々が大陸を横断して仕事や学業をする豪快な気質と、客人をもてなす暖かく細やかな心遣いを持ち合わせつつ、高緯度地域で暮らす知恵を加えて生活している現実に触れることができ、オホーツク海のすぐ向こうの岸には遠い東ヨーロッパの風が吹いていることを知りました。

最後になりましたが、終始、丁寧に応対して下さりましたフロロフ博士、まだ赴任してまもなくであったラドコワ博士をはじめ、かわるがわる食事会にお付き合い下さり日常の交流も深めることができましたサフニロの研究員の方々、そして通訳のアンナさん、とうとう名前を憶えられなかった運転手さん、そして、水研本部の方々にお世話になりましたことを、この場を借りてお礼申し上げます。また、サケマスと内水面に関するサフニロとの研究交流が今後もより良い方向で継続しますことを期待します。

参考：サフニロのホームページ
http://www.sakhniro.ru/　（ロシア語）

写真１　参加者とサフニロの庁舎前にて

写真２　研究報告会　サフニロ所内会議室にて

（なかじまみゆき：内水面資源部主査）